

込んでしまい、あとで苦笑した。

## 私の軍隊経験

愛知県 寺西公男

軍隊とは何であったのか。私は今この投稿を書くにあたって、静かに五〇年前を思い起こしている。徴兵検査、それは憲法に定められた国民の三大義務、つまり、兵役・納税・教育のなかの兵役の義務により日本男子である限り、必ず検査を受けなければならない義務があった。国のさきもりとして軍隊にはいるのである。もっとも私は現役志願兵として一年早く軍隊にはいった。「粉骨碎身、身をもって尽忠報国のまことをつくす覚悟であります」郷土の人々に見送られた氏神様の神前でこんな挨拶をし勇躍宮門をくぐったのである。

私は吉林省敦化の部隊に現地入隊した。「酷寒零下三十度」と実にきびしい寒さであった。こんな寒さのなかで初年兵の訓練は言語に絶するきびしいものであった。

訓練ばかりではない。内務班における言語・行動・一挙一動・すべてが古年兵の目のなかにあった。常任座敷の間、ビンタの恐怖にさらされていた。これも国のためと思いついて来たのである。ビンタが国のためになるわけではないのだが、無理やりに自分にそっくり聞かせていた。

私は前述したように現役志願兵として軍隊にはいったのであってどんな苦しみも耐えるのが当然でなくてはならないはずだったが、やはり人の子、なま身である以上、たたかれて痛くない者はない。かわのスリッパで力まかせになぐられたのである。初年兵は一人残らず顔がイビツになったといえはおおげさ過ぎるように思われるが、それはまぎれもない事実であった。

一期間六か月の教育が終ると二期の教育が待っていた。私は重機関銃にまわされた。七月の炎天下六十キロの重機をかついだり、ほふくして引きずる行為はなみ大抵のことではなかった。私は九月になり胸部をわずらい入院した。このため、その年の十一月内地に送還された。十二月の暮、治癒退院して中部二部隊「六連隊」に転属

となった。ここで二年間が過ぎた。

この間大東亜戦争が始まり、敵機が襲来するようになった。

昭和十七年私は憲兵を志願して採用され、その年の五月憲兵学校教習隊にはいった。中野学校での教育訓練もげきれつであつた。一日中勉強で追いまくられた。もちろんこれも自分が選んだ道だから弱音を吐くことは出来ない。いま考えてみるとよく頑張つたものだと思う。どうにか卒業することが出来、十二月憲兵を拝命した。名古屋憲兵隊に配属され築地分隊勤務となった。

大東亜戦争も次第に悪化して来た十八年一月、憲兵になって一か月あまりののち、南方派遣憲兵隊に転属の命令をもらった。第五・六野戦憲兵隊が編成され、私は第五野憲に編入された。総勢二千三百人と思う。

二月上旬宇品を出帆シンガポール（昭南島）に上陸、二、三日後再び別の船でさらに南に向かった。そしてジャワのスラバヤ港に上陸したのは二月二十日頃だつたと思う。ここで約一か月待機した。もっともそれぞれの任地によって分隊ごとに別行動でひそかに出発して行っ

た。ここに来て一か月ほど過ぎた三月二十二日、いよいよ出発する日が来た。朝九時、離岸して洋上に出た。十隻船団が組まれ駆逐艦二隻の護衛により進んだ。

夕食後、甲板に出て雑談にふけていた時、「潜水艦だ」と誰かが叫んだ。急ぎ船室にはいり救命胴衣に手をのばした瞬間、ドスンという音と共に大きな衝撃を感じた。やられたと思つた。それで救命胴衣だけとは、あたりをみまわし救命胴衣をみつけ甲板に出ようとしたが出口がわからない。夢中で外に出ると、もう船は水面まで一メートルぐらいに迫っていた。この船には一千五百人ぐらゐの兵隊が乗っていたが、もう海のなか、甲板には右往左往する兵隊で一杯だつた。私達憲兵はこの船に通訳を含め十六人乗っていたが、もう探している時間はない。すぐ海に飛び込んだ。飛び込むというより歩いてはいつたという方が適切かもしれない。船から五十メートル離れなければいけないと聞いていたので、必死でおよいだ。二、三十メートル泳いだところで振り返ると船は真二つに折れて船首と船尾が拍子木を打つようになつた。ああ、垂直に沈んでいった。

泳いでいるうち、班長に逢った。あちこちに筏につかまった兵隊が、海面をうめていた。魚雷を受けたのは午後八時頃だったがその頃はまだ明るかった。救助を待つこと一時間半位、駆潜艇が来て助けてくれた。あたりはもうまっ黒であった。

深夜駆逐艇に移乗、任地に向かった。とりあえずアンボン島に上陸して武装をととのえ、さらに進んだ。我々にはまだ行き先は知らされていなかった。西部ニューギニヤのカイマナに上陸。ここではじめて任地はケイ諸島と知らされた。我々より二十日ほど早くこの地で勤務していた分隊を尋ねたが、全員マラリヤにおかされ枕を並べて討ち死にの状態だった。我々はかり寝の宿もなく野宿した。

蚊とスコールになやまされた数日後、ケイ諸島への郵便があり島へ渡った。いよいよ任地に着いたのだ。しかしここでもはいる家はなかった。数日後、屋根と縁があるだけの家があてがわれた。ようやく旅装をといたものの、なにから手をつけてよいかわからないまま、空襲にそなえ、防空壕掘りに専念した。

ある夜、空襲の直後「狼火」があがったという情報が入り、ただちに出勤、要所の搜索をしたがそれらしいものはみつけれなかった。戦況は次第に険悪化して、連日終夜緊張が続いた。私はそんななかで熱を出し入院した。肺結核と診断され野戦病院から後方へ転送を繰り返すうちに十九年四月、マニラ、ケソン病院を最後に内地送りとなった。

名古屋陸軍病院で肺浸潤に転症されて治癒退院、名古屋憲兵隊本部附となった。ときに十九年九月。

翌二十年一月三日B29による名古屋初空襲により、私の下宿先西区菊井町附近は大きな被害を受けた。私は下宿を中村区に移したが、これも五月の大空襲で焼きだされた。そういうなかで終戦を迎えた。

終戦後、海部郡の木曾川附近に撃墜されたB29の搭乗員にかかわること二度進駐軍に呼び出された。さいわいにして軍事裁判にもかけられずすんだ。